其ノ日ニ成テ、人々ニ催タル十五荷ノ破子皆持來ヌ、助泥ガ破子未ダ不見エズ、僧正怪シク助泥ガ破子ノ遲カナト思給ケル程ニ、助泥袴ノ抉ヲ上テ扇ヲ開キ仕ヒテ、シタリ顔ニテ出來タリ、僧正此ヲ見給テ、破子ノ主此ニ來ニタリ、極クシタリ顔ニテモ來ルカナト宣ヒケルニ、助泥御所ニ參テ頸ヲ持立テ候フ、僧正何ソト問ヒ給ヘバ、助泥其ノ事ニ候フ、破子五ツ否借リ不得候ヌ也ト、シタリ顔ニ申ス、僧正、然テト宣ヘバ、音ヲ少シ短ク成シテ、今五ハ入物ノ不候ヌ也ト申ス、僧正然テ今五ツハト問給ヘバ、助泥音ヲ極ク竊ニワナナカシテ、其レハ搔斷テ忘レ候ニケリト申セバ、僧正物ニ狂フ奴カナ、催サマシカバ四五十荷モ出來ナマシ、此奴ハ何ニ思テ此ル事ヲバ闕ツルゾト問ハムトテ、召セト喧シリ給ケレドモ、跡ヲ暗クシテ逃テ去ニケリ、此ノ助泥ハ物可咲シウ云フ者ニテナム有ケル、此ニ依テ助泥ガ破子ト云フ事ハ云フ也ケリ、此レ嗚呼ノ事也トナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔賀陽院水閣歌合〕長元八年五月十六日、於賀陽院水閣有和歌合、〇略中　女房料、左方調備檜破子、以紫檀地螺鈿爲足、以村濃色結之、繪圖山水盡風流之美、方人傳取置簾前矣、

〔春記〕長暦四年十一月廿三日甲戌、今日故中宮第一女宮着袴日也、〇略中　藏人左少辨經成爲關白御使、令持大破子四荷參臺盤所、其破子之體、以薄物張之、採色莊嚴、太以微妙也、其中入物者、染張綾百疋、同絹百疋也、各入五十疋云々、藏人等荷之參持臺盤所云々、

〔徒然草上〕御室にいみじき兒の有けるを、いかでさそひ出してあそばんと、たくむ法師どもありて、能あるあそび法師どもなどかたらひて、風流の破子やうのもの、念比にいとなみ出て、箱風情の物に玄たゝめいれて、ならびの岡の便よき所にうづみをきて、紅葉ちらしかけなど思ひよらぬさまにして、御所へ參りて、兒をそゝのかし出にけり、うれしとおもひて、こゝかしこあそびめぐりて、有つる苦のむしろになみゐて、いたうこそこうじにたれ、あはれ紅葉をたかん人もがな、